

● 事例 ●

附属高校と大学との7カ年接続教育

伊藤 康児

(名城大学 人間学部 教授)

朝の光景

毎週水曜日と木曜日の朝八時五〇分ころ、大型バスが一台、大学のキャンパスに到着し、制服を着て、そろいのバッグを手にした高校生たちがバスから降りてきます。生徒たちはこれから一四時五〇分ころまで、大学教員が指導する授業を受け、一部の授業は大学生といっしょに受講します。

毎週、大学にやってくるのは、名城大学附属高校の普通科国際クラスの二年生と三年生です。附属高校と大学が遠く離れているので、生徒たちは大学の所有する大型バスに

乗り、片道五〇分ほどかけて高校と大学の間を往復するのです。

附属高校と大学の「遠い」関係

愛知県名古屋市は人口二二五万人を数え、中部圏の中心都市として発展しています。名城大学附属高校はこの名古屋市の西北部に位置し、普通科と総合学科をもつ私立高校です。生徒数一九〇〇名あまりと県内最大規模、入学志願者は二〇〇七年から毎年、愛知県内で最多となっています。一方、名城大学は文系・理系にまたがる八学部、一〇研究科、学生数一六〇〇〇名あまりを有する総合私立大学で

す。学部のうち七学部は名古屋市の南東部、一学部は岐阜県可児市に設置されており、附属高校とはいずれも離れています。

こうした位置関係もひとつの要因となつて、過去の附属高校と大学との関係は、志願者を送り出す・受け入れる、というその一点でのかわりにとどまっていた、といつてよいでしょう。しかし逆にここにこそ、附属高校と大学との7カ年接続教育が芽生える素地があつたともいええます。

高校と大学ともにさらなる発展をとげるには

名城大学が7カ年接続教育の検討を始めたのは、まさに二一世紀に入った二〇〇一年です。附属高校と大学との関係をどう発展させていくか。生徒の約半数が名城大学に入學する、という現状からすると、高校在学中から名城大学で学ぶにふさわしい学力や意欲を伸ばし、大学入学後は各学部の中心的存在として大学をもち立ててほしい、という思いが大学にはありました。附属高校には穏健な気質の生徒が比較的多いことも、大学の側がそうした思いを強くする要因でした。

新学部設置を契機とする接続教育

この時期には、名城大学に人文系の人間学部を新設する計画が進行していました。新学部設置を機に新しい教育を、との意向から、附属高校と人間学部の双方から踏み込んだ接続教育を構想し、これを「附属高校と大学との一貫教育」と名づけました。

具体的な教育内容や運営方法について約一年間、双方の教員、事務職員がメンバーとなつた委員会で検討を重ね、附属高校の普通科に「国際クラス」（一クラス・生徒数四〇名）を設置する、このクラスの生徒は名城大学人間学部への進学を前提として附属高校に入學する、大学は高校で所定の基準を満たした生徒を受け入れる、高校のカリキュラムに大学の科目を組み入れるなど、接続教育に関する基本方針を定めました。二〇〇二年一月に人間学部の設置が認可され、翌年四月、まず一年生だけの国際クラスが人間学部と同時にスタートしています。

このとき入学した国際クラス一学期生は、二〇〇九年度には人間学部四年生になっています。一〇〇年に一度の経済危機といわれ、わが国でとくに景気がよいとされてきた中

部圏でも、企業が新卒者採用数を大きくしぼりこんでいるなか、国際クラス出身学生には内々定をもらっている学生が多く、企業から将来性を評価されている、といった手ごたえを感じています。

多様な経験から探究心を養う

名城大学人間学部は、心理、教育、社会、国際、コミュニケーションの五つのキーワードに集約される授業科目を開設し、人間や社会の在り方を追究する学際指向の学部です。「人間性豊かな実践的教養人」の育成を理念とし、「幅広い教養の修得」「人間性の追究」「グローバルマインドの養成」を教育目標に掲げています。

こうした人間学部へ接続できるよう、国際クラスのカリキュラムは図1のようにユニークな工夫を含んで編成されています。とくに国際クラスの名称にふさわしく、「グローバルマインドの養成」と密接に関わる英語運用能力の向上、異文化の理解には力を入れています。ネイティブの教員による英会話、留学生とともに過ごすサマーキャンプ、三週間のニュージーランド研修など、生徒が英語でコミュニケーションをとり、異文化と接することができる場面

名城大学附属高等学校 国際クラス			名城大学 人間学部			※ 斜体表記の科目は英語による授業		
高校1年生	高校2年生	高校3年生	大学1年生	大学2年生	大学3年生	大学4年生		
高校生としての基礎学力充実 個性ある国際クラス授業	国際クラス 固有科目の充実	国際クラス 課題研究レポートの完成	幅広い人間や社会の理解	5つの分野の導入学習	選択した系列を軸に学ぶ	目指す専攻の深い研究		
英会話Ⅰ ネイティブ教員による授業	英会話Ⅱ ネイティブ教員による授業	英語表現・ライティング ネイティブ教員による授業	人間学総論	異文化コミュニケーション	ビジネス・コミュニケーション	卒業研究ゼミナール (卒業論文)		
異文化の理解	異文化の理解・日本文化	歴史と文化 環境人間学 大学で受講	社会学概論	対人関係の心理学	文化表現論	日本文化史		
情報活用リテラシー (コンピュータ利用技能の学習) 大学での夏期集中講座	心の科学 コミュニケーション論 大学で受講		異文化理解	学習社会論	比較言語論	ジャーナリズム論 現役記者が新聞報道の 実際を伝える		
サマーキャンプ(校外) 次年度の海外研修に備えて英語のみの活動	海外研修(ニュージーランド) (修学旅行代替行事) 約2週間の海外体験で視野を広げる	課題研究 高校3年間の集大成としてレポート作成や口頭発表	性格心理学	国際関係論	教育史	発達臨床心理学		
留学生交流会	留学生交流会	留学生交流会	国際文化論	地域研究	発達臨床心理学	フィールドワーク		
			国際コミュニケーション	海外コミュニケーション 海外旅行や留学に役立つ英語を学ぶ	海外研修(4週間) 大学での講義と4週間の英語圏研修	基幹ゼミナール 各教員の指導を受けて探究を深める	エッセイ・ライティング	
					プレゼンテーション 英語による口頭発表の上達を目指す			
					特別留学プログラム 英語圏での半期留学			
					就職準備	就職活動		
目標資格 英検準2級	目標資格 TOEIC 450点	目標資格 英検2級/TOEIC 470点	目標資格 TOEIC 500点	目標資格 TOEIC 550点	目標資格 TOEIC 600点/英検準1級	目標資格 TOEIC 730点/英検1級		

図1 高校・大学7ヵ年接続教育の概要(2009年度)

さまざまな形で設けています。

これらの工夫には、英語力向上のみならず、生徒の「探究心」を目覚めさせようとのねらいもあります。同世代の外国人とともに生活するサマーキャンプは、日ごろの生活を見直す貴重な契機です。ニュージーランド研修には、事前事後の調べ学習とレポート作成も課せられ、現地での三週間は異文化の中で探究テーマをつねに自覚しながら生活を送ります。さまざまな活動によって生徒の知的好奇心を刺激し、学びへの意欲を高めるよう促すわけです。

企業がもし、国際クラス出身学生のなかに将来性を認め、てくれたとすれば、いわゆる受験勉強によって個性の自由な育成を妨げられることのない利点を十分に生かし、附属高校と大学が七年間にわたって生徒・学生に促してきた多様な経験の成果である、といつてよいでしょう。

大学での学び方を体得する

7カ年接続教育の重要な柱の一つが大学での受講です。高校一年生は夏休みに入つてすぐの時期に土日を除く七日間、午前中に大学の情報処理教室に来て、「情報活用リテラシー」の集中授業を受講します。資料検索や情報の整理・

活用といった大学での探究活動を支えるスキルの修得を目指しています。

二・三年生は週一回、大学キャンパスにバスで通い、授業を受けます。クラスをさらに二分する徹底した少人数で二名のネイティブ教員から英会話と英語表現を学ぶ一方で、大学生といつしよに、人間学部への橋渡しとなる講義四科目も受講します。これらの授業は、講義の聞き方、ノートの取り方、期末試験にのぞむ心がまえなども伝える初年次教育の先取りといえます。大学の授業や試験の方法は、高校のそれとは大きく異なっていることが通例です。国際クラスの生徒には、大学入学前から必要な心がまえやスキルを身につけ、入学後すぐに大学で存分に学んでもらおう、というわけです。

大学生といつしよに受講する授業では、高校生と大学生がいつしよにグループワークに取り組むこともあります。高校生もまともな役になります。大学生と同じように課題に取り組むことができますし、期末試験では大学生より平均点が高い場合さえあります。もちろん、大学生といつしよの学習に気おくれを感じる生徒もいますから、最初は高校生がまともな着席できるよう座席指定したり、グループワークはまず高校生二人に大学生一名といったグループ

編成から始めたり、と段階を踏んで進めていきます。

大学のキャンパスでは、高校生にできるだけ大学生として過ごすよう促しています。橋渡しの講義四科目については、大学の基準を上回る成績を取れば大学入学後に単位を認め、しかも高校の授業でもあるという、いわゆるダブル・カウントをしています。

探究活動の基礎を身につける

7カ年接続教育には、大学入学者選抜にあたって筆記や面接による試験を生徒に課さないという特徴があります。ゆとりのある学習を通して人間的に成長してほしいという

思いから、高校で所定の基準を満たしたことを大学は出願書類にて確かめて、入学を許可しています。

この方式により可能となった学習が、高校三年生の最後に設定される「課題研究」です。高校生自ら研究テーマを選んで探究活動を行い、成果を八〇〇〇字の小論文にまとめます。いわば大学の卒業論文に当たるものといえます。う。

課題研究は、附属高校の充実した指導体制に支えられて進むため、大学教員は研究のプロセスにそれほどかかわる

形をとってはいませんが、求めがあればテーマ設定の相談にのったり、資料・文献の収集や分析をアドバイスしたりします。最後には、生徒が一人ずつ、パソコンで作成したスライドをスクリーンに投影しながら発表するプレゼンテーション形式の成果発表会も行われ、これには大学の教員も出席し、講評します。

高校三年生の秋から冬にかけて、多くの生徒が大学受験のための勉強に時間を費やす時期に、国際クラスでは探究活動に取り組み、小論文を仕上げるという目標に向かって学習しています。

課題研究の最初の成果

課題研究は、大学での学習にスムーズにつながる重要な意味も持っています。人間学部には、一年次にアカデミック・スキルズ、すなわち大学での学び方を学ぶ必修科目「基礎ゼミナール」が設けられています。パソコンや図書館の使い方などを学び、大学で探究活動を行うための基本的なスキルを身につける少人数ゼミ形式の科目です。この授業の中で課題研究の最初の成果を見ることができます。

国際クラス出身以外の学生の多くは、ほとんど初めて学

ぶ内容であるためか、教員の指示を受けてもすぐ学習活動に取り組めるわけではありません。一方、国際クラス出身の学生は「課題研究」を体験し、テーマ設定から資料検索、論文の仕上げまでひととおり学んだばかりのため、主体的に動きます。真摯に課題に取り組む姿勢は他学生の模範でもあり、アドバイス役も務めてくれます。

海外研修への挑戦

人間学部入学後に海外で研修する国際クラス出身学生も比較的多くいます。とくに英語圏の大学で主に語学研修を数ヵ月にわたって行う「特別留学プログラム」を利用して、二〇〇九年七月現在、二名（他の学生も一名）が研修しています。九月以降にはさらに三名（他の学生も一名）が出席する準備を整えていましたが、新型インフルエンザの世界的流行により、延期になったのは残念です。大学を休学して一年間、英語圏に研修に出かけることにも、国際クラス出身学生は積極的です。

大学入学後にさらに力を伸ばす仕組み

英語力については、高校三年生までに「英検二級、TOEIC四七〇点の取得」を目標として掲げていますが、ほぼ全員が英検準二級以上に合格します。入学時に大学で習熟度別クラス編成を目的に実施するブレースメントテストでは、二〇〇九年度入学の国際クラス出身学生をみると、一名を除く一七名が全入学者二四九名の上位二分の一に位置する成績をあげています。

しかし、人間学部のカリキュラムには、当初、入学時点で高い意欲やスキルをもつ学生をさらに伸ばす手だてが用意されていませんでした。そのため、国際クラスの生徒たちがせっかく大学の授業の一部を先に学んでも、それをベ이스に大学でさらに力を伸ばすチャンスがなく、むしろ大学での学習の幅を狭めてしまう面すら出ました。とくに英語の学習については、国際クラス出身学生から「高校に比べ大学では英語を勉強する機会が少ない」と不満の声が上がりました。

二〇〇七年度に行った人間学部カリキュラムの一部改正にあたっては、こうした要望にも配慮しました。国際クラ

ス出身者だけに特別なことをするのは難しいのですが、初めからレベルの高い「インテンシヴ・イングリッシュ」などの科目の受講を許可するなど、彼らの意欲にこたえる工夫が必要と考えています。

また、国際クラス出身者は高校時代からコミュニケーション主体の学習を続けてきただけに、スピーキングやリスニングにはすぐれているものの、文法面の理解がいまひとつ、との傾向がありました。そこで、会話力の裏づけとなる文法も重視し、バランスのよい英語力を身につけてほしい、との大学側の声にこたえて、附属高校では国際クラスのカリキュラムを二〇〇六年度に改編し、会話だけでなく、文法を強化する授業を増やしています。

附属高校と大学の協同運営体制

こうしたカリキュラムの改編は、附属高校と大学が互いに意見や要望を出しあい、そのとりまとめをもとにできました。附属高校と大学とは、ふだんからさまざまなチャンネルを通じて連絡をとりあっていますが、接続教育の運営に関してまとまった協議をする場として、連絡会を年三回開催しています。教員、事務職員二〇名ほどのメンバーが

集まり、さまざまな論点について協議を行うため、二時間以上かかることも珍しくありません。そもそも高校と大学とは制度も異なり、年間授業予定にもズレが生じるため、調整に苦労もあります。

成果や課題の検証

課題はさまざまあるものの、附属高校と人間学部の接続教育に対して、地域の中学生と保護者の関心は高まっています。

高校説明会の中で実施する国際クラス説明会の参加者は年々増えていて、高校と大学双方の教員が行う説明を皆さん熱心に聞いてくださいます。二〇〇七年には一〇〇名近い中学生とその保護者の皆さんが集まりました。また先輩に聞いて知ったという中学生も多いですし、兄弟で国際クラスに入学してくれる事例も出ています。いわゆるクチコミの効果は大きいようです。

こうした成果と経験を生かして、7カ年接続教育を全学に広げる可能性についても、検討を続けていきます。